

エッセイ

——私の文学館散歩(三)——

小倉・松本清張記念館 高井戸・旧松本邸

松村 茂治

【翡翠海岸】

このシリーズに、北九州・小倉にある松本清張記念館を加えてみようと思ったのは、本誌第二十八号(二〇一五年春刊)に掲載された、富山在住の井上亮二氏の「琅への手紙」を読んだことである。その年の秋、博多に出かける用事があったことも、その気持ちを強くしていた。

井上氏は、手紙の冒頭で、「琅」が何に由来する命名なのか、「美しき玉」を求めていることなのかと問い、「富山県の宮崎海岸は、新潟県の姫川から流れ出した翡翠が打ち上げられることで有名ですが・・・」と続けた後、万葉集にある「沼名川の底なる玉」を求めて得まし玉かも、拾

ひて得まし玉かも、惜(あたらし)しき君が、老ゆらく惜しも」を引用され、この地に翡翠(琅玕)が出るに至ったエピソードを紹介している。

本誌創刊号(一九九二年四月)及び第二十八号の「あとがき」に、主宰者宗内敦氏が書かれているように、「琅」はまさに「琅玕」であり、我ら同人は、「麗しき玉」を指して、日々、文章に磨きをかけていることを怠ってはならぬという、主宰者の熱き思いを込めての命名なのである。

井上氏の「手紙」を読んで、私が最初に行ったことは、日本地図を広げて、「宮崎海岸」を探したことである。それは、姫川が日本海に注ぐ糸魚川市から、海岸線を富山方

面に向けて二十一三十キロ行った所であった。この辺りについて、私知っていることと言えば、三千円を超す北アルプスが、日本海に向けて一気になだれ落ち、富山湾に沈み込んでいくということくらいである。山地がいきなり海に落ち込んでいるわけだから、そこは昔から交通の難所であった。それゆえ、最近建設された高速道路は、親不知の辺りでは海上に競り出すようにして、その急峻な地形を避けている。かつては、親子といえども、そこで足を滑らせ波にさらわれたら、その後再び相見えることは叶わなかった。今や、海に突き出した高速道路に車が行き交い、絶壁に穿たれたトンネルを新幹線が疾走する時代である。そして、海に沿って走る在来線には「えちごトキめき鉄道日本海ひすいライン」というお洒落な名前まで冠し、すっかり明るく変貌した越前・越後。水上勉が今の時代の作家だったら、果たして「越後つづいし親不知」を書いたのだろうかと思うのである。

地図を眺めていて不思議に思うのは、翡翠の見つかる宮崎海岸が、姫川の河口からかなり離れた所、しかも、河口より随分と西側にあることだ。これは、海流の関係と思うが、日本列島に沿って流れているのは対馬海流であり、翡翠がこの流れに乗っているとすれば、河口より佐渡寄りの

海岸で見つかるはずである。地図を詳しく見ていくと、姫川より富山側には青海川があり、その源流でも翡翠が見つかっているようなので、宮崎海岸の翡翠は、姫川産というよりは青海川産と考えるべきかもしれないが、それでも青海川の河口は姫川より距離にして五キロほど西に寄っただけなので、この辺りには、陸地に沿って西進する海流があるということなのだろう。

こんなことを考えているうち、いつしか、学生時代に読んだ清張の短編「万葉翡翠」のことを思い出し出した。昔読んだ文庫本は、紙の劣化が著しく、数年前に処分してしまっていたので、内容を確かめるためには、新たに買い求めなければならなかった。

新しい文庫本のページを繰るうち、井上氏が引用していた一首を、私は、万葉集そのものからではなく、この作品を通して知ったことに思い至った。姫川で翡翠が取れるということを知ったのも、この作品を読んだことだったようない気もする。あるいは、学生時代、大糸線沿線の山々には足しげく登っていたので、同行の先輩に教えてもらったのかも知れない。

当時、信州方面の山に入るとすれば、新宿か八王子発の中央線の夜行列車を利用するのが常だった。だから、「万

葉翡翠」の中で、「・・・三人は、新宿駅から長野行きが遅い列車に乗った。(略)中央線のこの夜汽車は、間もなく、線路の彼方に赤い尾灯をすぼめて消え去った。」との一節に出くわすと、ああ、昔よく利用したあの列車のことか・・・と当時の情景が甦ってくる。ただし、新宿発の中央線は、松本行きか南小谷行きではなかったろうか。当時、長野行きがあったのかどうか、確認はできていない。

「万葉翡翠」の中に、気になるところを見つけた。姫川について、「姫川は、大体、糸魚川と信州の大野を繋ぐ大糸線に沿っている。上流は長野県の鹿島鎗(註)の山麓から出ているらしい。だがそれが海に注ぐまでは・・・」という記述である。第一に、ここは、「大野」ではなく、大野でなければならぬ。大糸線は、信濃大町と糸魚川を結ぶので、そう名づけられたはずである(始発は松本駅だが)。ここで敢えて架空の地名を使う必要性はないから、字画が似ているが故の誤植と思われるが、さて、いつの時点での誤植だったのだろう。文庫本の初版は昭和四十年とあり、私が昔読んだのは、この頃のものである。平成十四年に六十六刷改版とあり、最近買い求めたのは、平成二十一年の八十三刷である。昭和四十年からずっと「大野」でやってきたのだろうか?以前読んだときには何の疑問も持たな

後、犀川、千曲川と名前を変え、最後は信濃川となって日本海に注いでいるように見える。「調べ魔」で有名だった大富豪の手から、姫川の水はこぼれてしまったということなのだろうか?もつとも、当該箇所をよく読むと、「・・・鹿島鎗の山麓から出ているらしい。」とあるので、文豪自身、確信を持ってはいなかったようだ。

鹿島槍ヶ岳といえば、清張には、この山を舞台にした短編がある。「黒い画集」に収められた「遭難」である。山好きにとつては、「万葉翡翠」よりこちらの方が、読み応えがあった。事故に見せかけなるべく緻密に仕組まれた殺人事件だった。山を歩くときに、少しでも体力を消耗させないようにと、休憩の取り方や水分補給の仕方など、先輩から後輩へと引き継がれてきた山歩きの知恵のようなものがある。この作品では、それらを逆手にとつて、必要以上に体力を消耗させ、遭難死を演出した・・・。調べてみると、「遭難」は「万葉翡翠」より、四年ほど前の刊行となっている。「・・・鹿島鎗の山麓から・・・」は、「遭難」の副産物ということで、改めて綿密な取材はしなかったということなのかもしれない。

ああ、小倉の記念館に向かうはずが、越前・信州方面で

かったが、見落としていたのだろうか。改版時にミスが生じたとしても、十年以上経っている。読者の中には鉄道マニアもいるだろうから、誰も気づかなかったということは考えにくい。新潮社も、分かった上で、大野でも問題なしということにしているのだろうか。新潮社版の松本清張全集が定本になっているのだから、そこに当たれば、どの段階でのミスか、分かるのかもしれない。

第二に、誤植よりもっと重要なことに気がついた。姫川の源流が、「鹿島鎗の山麓から」という記述である。確かに、姫川は大糸線、千国街道に沿って北上し日本海に注いでいるが、鹿島鎗を水源とする流れは、千国街道と鹿島鎗の間に、それほど高くはないが山が連なっているため、直接、姫川に合流することはできない。その流れは、姫川への合流を遮る山並みを迂回するように、鹿島川・高瀬川となつて南下せざるを得ないのである。当初、それは大町近辺でUターンをして仁科三湖の一つである木崎湖に流れ込み、中綱湖、青木湖を経て、姫川になるのかと思つたのだが、少なくとも地図上では、仁科三湖から北上する流れは出ていない。そもそも、川の流れは、車とは違うのだから、山を迂回して簡単にUターンという訳にはいかないはずである。地図で見ると、鹿島鎗に発した流れは、高瀬川の

ずいぶん長時間をとつてしまった。翡翠海岸から富山湾を隔てたところが能登半島である。後に、そこを舞台にした作品を取り上げるつもりなので、ひとまず小倉に向かうことにしよう。

(注) 新潮文庫は「鎗」の字を使っているが、地図は「槍」を使っている。

【小倉・松本清張記念館】

博多駅で、新幹線を利用しようか、在来線にしようかと、少々迷つたのだった。時刻は、昼を少し回つたところ。新幹線を利用すれば小倉までは十五分ほどだから、時間の節約にはなるが、五時頃までに博多に戻ってくればいいというスケジュールだと、却つて、時間を持てあましてしまうのではないかと思つたのだ。のんびり車窓からの景色を眺めるのも悪くはないだろう、この地をこんな風に旅行できる最初で最後の機会かもしれないと考え、在来線で行くことにして切符を買い求め、階段を登っていくと、ちょうど小倉行きの普通列車が入つて来た。

博多を出て、二―三駅は覚えていたのだが、のんびり車窓からの景色を楽しむ間もなく、眠気が襲つて来て、気が

ついたとき、列車は大きな川を渡っているところだった。スマホの地図で調べてみると、それは遠賀川のように、地図を先の方へスクロールしてみると、記念館へは、終点の小倉駅からではなく、一つ手前の西小倉駅からの方が断然に近いことが分かった。

九州というと、南国というイメージがあるが、いつもそれは裏切られる。この日も、駅から外へ出てみると、日は差しているものの、風があるせいか肌寒い。そもそも、九州イコール南国というのが、短絡的な連想なのだと思う。玄界灘は日本海の一部なのだから。

駅を出たところで、記念館へ向かう大通りは、その名もずばり「清張通り」である。実際、それは極めて適切な命名だと思った。その大通りを五分程行けば、確実に記念館にたどり着くことができるのだから。記念館は、小倉城の西の外れ、枯れ堀を利用して建てられていた。

記念館のホームページを見るたびに、一体どういう建物なのだろうと不思議に思っていた。ドーム状の屋根を設えた頑丈そうな建物なのだが、近くに寄って真横から見ると、それは要塞のようにも見える。エントランスが一階にあるとすれば、「要塞」は、堀の底、つまり地下一階から立ち上がっており、エントランスのある建物より屋根一つ高く

なっているので、全体としては三階建てということになる。この建物には窓は一つもなく、周囲は、まるで敵からの攻撃を防ごうとしているかのように堅固に固められ、金属製と思われるやや丸みを帯びた屋根も簡単には破られそうもなく、全体的にはトーチカのようなのだ。エントランスのある建物が切妻型の和風様式なので、いま一つ統一感に欠けるような気がする。

中に入ってみて、その理由が分かった。そこには、東京にあった清張のかつての住まいが移築再現されているのだった。建物の中に、実際の二階建ての建物を、使われていた当時のまま移築する訳だから、それなりのボリュームが必要となるのだ。

移築されていたのは、仕事部屋である書斎と編集者たちとの面談に使われたであろう応接室それに膨大な資料を収めた書庫の一部ということで、それぞれに興味を引かれたのだが、この再現された旧邸宅の前に掲示されていた一枚の航空写真から、しばらくの間、目が離せなくなってしまうのだった。写真は、ありし日の旧邸を低空から撮ったもので、邸宅のすぐ脇を見覚えのある電車が走り、庭先に立って空を見上げる清張氏も写っている。邸宅は、杉並区高井戸にあったようだ。

高井戸なら、旧邸の脇を走り去ろうとしているのは、渋谷行ききの井の頭線である。私は、生まれてからずっと、調布市、府中市と京王線の沿線で暮らしてきた。井の頭線と京王線は、京王電鉄が所有する路線で、私が子どもの頃、京王線も井の頭線も、緑色の車輦を使っていたが、その後、アイボリーになり、いつの頃からかステンレス車輦になり、最近の井の頭線は、前面や側面がピンクやパープルに彩色され、カラフルでお洒落な車輦となった。写真の井の頭線は、アイボリー時代のものである。キャプションには、写真は昭和四十三年に撮られたとある。

写真の前に立って、これはメモしておかなければならないと思ったのだった。昭和四十三年（一九六八年）と言えば、すでに半世紀も前のこと、この間、東京は、大きな変貌を遂げてきた。都心に近く、交通至便で閑静な住宅街が、そのまま残っているとは思えない。しかも、清張が亡くなったのが平成四年（一九九二年）であり、平成十年（一九九八年）には、記念館が開館し、一部とはいえ旧邸を移築してしまった訳だから、旧邸自体、いつまでも写真のままではないであろう。高井戸に旧邸跡を見つけるのにはかなりの困難が伴うものと考え、「旧邸探索」の一助になればと、旧邸付近の略図を描き写したのである。

館内の片隅に置かれていたガラスケースの中に、ページを開いて展示されていた古い雑誌に目が留まった。それは、今や、推理小説の代名詞とも言うべき「点と線」の第二回目（第二章）「情死体」の冒頭部分で、その書き出しは、「鹿児島本線で門司の方面から行くと、博多につく三つ手前に香椎という小さな駅がある。」となっている。香椎と言えば、この日、私は、列車がこの駅を出たところまで覚えているのだが、その後ぐっすり眠ってしまったのだった。

そうだった、香椎の海岸で男女の情死体が発見されたのが事件の発端だった。東京駅での奇跡的な四分間は有名な話だった。青函連絡船がまだ健在だった頃で、その乗客名簿がアライバイ工作に使われていたことも覚えている。九州と北海道、それに鎌倉といった具合に、場面設定が観光地巡りのようになっていいるのも、この小説が旅雑誌に掲載されたというのを知って、納得がいくのだった。

九州旅行から戻って、「点と線」をもう一度読んでみたくなり、仕事の帰りに新宿紀伊國屋をのぞいてみた。後で触れることになるが、私が清張にのめり込むようになったのは、評論家の平野謙が解説を担当した新潮文庫の「傑作

短編集 全六巻」（昭和四十年発行）を通してである。それ以来、清張作品は、もっぱら新潮文庫で読んできた。もともと当時の清張作品には、カッパノベルスでしか読めないものもあり、「点と線」もその内の一冊だったと記憶している。今では、新潮文庫には、ほとんどの清張作品が入っているの、その棚を探してみたのだが、あいにく目当てのものは見当たらなかった。

今、「あいにく」と書いたが、何が幸いするか分からない。帰りの電車の中で読む本がなくなっていたこともあり、別の出版社の文庫本の棚を探したのである。一社、二社・・・となくて、ここでなかったらあきらめようと思って最後に回ったのが文春文庫の書棚だった。そこにあった「点と線」を手にとってみると、表紙には、「松本清張記念館監修」とある。行って来たばかりの記念館が監修しているのも何かの縁と思い、今回はこれで読んでみることにした。そう決めて、改めてよく見てみると、本の様子にどこことなく違和感がある。本の小口に黒っぽい筋が入っているのがある。その正体は直ぐに分かった。ところどころに、ページ一杯に挿絵が入っているのだった。

もう一度表紙を見ると、「風間完・画」とある。文庫本にカラーの挿絵というのも珍しいが、どの絵からも、あのを残したままだったという件があり、学生時代の私は、えらく納得したのだった。「推理劇場」のフィルムには、春画の件は出て来なかったが、残された衣服に付着していた塗料から、監禁されていた場所が特定できるというところが紹介されていた。たしか、それは、日本政府としては手の出しにくい所だったので、事件がうやむやにされていたのではなかったかと、うる覚えの記憶を辿ってみたりしたのだった。

清張については、反骨の人、反権力の人といった評価がされるが（多分に、そういうところはあると思うが）、彼のドキュメンタリー作品に接してみると、単なる反権力と言うのではなく、本当のことを知りたいというところに、彼の根本があったように思えてならない。

【私の清張作品（一） 短編】

ある時期、一人の作家の作品を立て続けに、のめり込むようにして読むことがある。大江健三郎、安部公房、福永武彦、辻邦生、野坂昭如、村上春樹、藤沢周平・・・みな、そんな風にして読んできた。ああ、小池真理子もそうだった。無論、松本清張もそういう一人だった。

のめり込むわけだから、その作家の作品のなかに、こ

頃の昭和！という郷愁が漂ってくる。奥付には、「本書は『点と線』（松本清張 風間完・画 二〇〇二年 文藝春秋刊）を底本とした。」とある。画家は、昭和三十年代の情景を、平成になってから甦らせたのだろうか。記憶だけを頼りにしたのか、古い原画があったのか。当時の写真を参考に描くということもあるのかもしれない。いずれにしろ、この挿絵に出会えたのは、記念館のおかげである。

記念館で一番時間を費やしたのは、「推理劇場」だった。そこでは、「日本の黒い霧」を題材にしたドキュメンタリー映像が放映されていた。帝銀事件、下山事件、三鷹事件、松川事件・・・どれも私が〇歳から一歳の頃の出来事で、事件そのものについてはリアルタイムでは知るよしはないが、裁判が続いていたこともあつてか、もの心ついてからも、マスコミ等で取り上げられることがあつたので、記憶には残っている。

「日本の黒い霧」のなかで、一番記憶に残っているのは、「下山事件」である。大方が下山自殺説をとっているのに対して、清張は、地道な証拠を積み上げて、他殺説をとっていた。その証拠の一つに、下山はどこかの貸金庫に春画

らの関心を引きつける一貫したものがあるに違いないが、それとともに、最初にどの作品と接するのが重要な鍵となつていように思う。清張に関しては、新潮文庫の「傑作短編 全六巻」が最初の出会いだった。一―二巻は、「或る『小倉日記』伝」に代表される現代小説、三―四巻は、「西郷札」「佐渡流人行」等の歴史小説、五―六巻が「張り込み」「万葉翡翠」等の推理小説という構成で、新潮文庫のこの構成は今も変わっていない。

どの一篇にも、遠い世界のこととは思えないリアリティがある。特に、推理小説では、とんでもない悪党が犯罪に及ぶのではなく、また、犯罪には常に天才的なトリックが用意されなくてはならないということでもなく（むしろ、そういった技巧が破滅につながるということを教えてください）、いろいろなところがある）、いわば、日常の中の犯罪とどうやら、犯罪への親近性といったことが、清張短編の特徴だった。すぐ隣にいるような平凡な人間が、いや隣ではない、私自身がいつ犯罪に手を染めないとも限らない・・・ひよっとしたら、すでに一歩足を踏み入れてしまっているのではないかといった思いに駆られるのである。

たとえば、「この会社に****という人間が存在しなかったら、どんなに人生が愉しいだろう（略）****さえ居

なかつたら・・・」（「偶教」という思い、組織の中で生活している人なら、誰にだつてあるのではないか。「自分****を殺害しようと思った。その決心の理由を縷々と書く必要はない。要するに憎悪である」（「捜査圏外の条件」というくらい、人を憎く思ったこと、さて、私にはなかつたらどうか。店に入つて来た客が好みのタイプだったので、つい、「・・・よかつたら、持つてらつしやいよ。（略）近所の人だから、お貸しするんですよ。（代金は）いつでも都合のいい時にもつてらつしやい」（「坂道の家」と、好みのタイプの女客に特段の「そんなく」をしたくなる小間物屋の親父の気持ち、私は商人ではないが、分からなくてはならないのである。この親父、根っからの遊び人というのではない。元来は、真面目一本槍の超堅物、生活を切り詰め、爪に火を灯すようにして生活をしてきた人物である。「若い者のようにばかなのぼせかたをするはずはないのだ。がっちり屋とひとから言われているくらいで、その方には自信があつた」のである。その親父が、女に入れあげ、一線を越え、さらにその先まで行つてしまふ・・・。一線の手前で立ち止まる人間とそれを超えてしまふ人間の間、どれほどの違いがあるというのだろう。私は、堅物というよりは、どちらかと言うとかなり柔らかい

か？）や「熱い空気」では、復讐や仕返しを画策する主人公にいつしか自分自身を重ね合わせて一喜一憂し、私はこんなにも復讐ものが好きだつたのだと、それまで気づいていなかった自分の一面を知つたのだつた。
改めて新潮文庫の傑作短編（一）に収められた「現代小説」、例えば「或る『小倉日記』伝」や「火の記憶」などを読み返してみても、もし、清張がこれらの作品の後、「点と線」や「ゼロの焦点」に向かわず、現代小説のみを書き続けていたら、どんな作品群を残したのだろうか、と半ば残念な気がしてくる。もちろん、清張の推理小説が読めなくなることの方が残念の度合いは大きい、現代小説の中にこそ、彼独特の人間描写があるように思えてならないのである。

【私の清張作品（二） 長編】

長編のなかで惹かれる作品は何かと問われれば、即座に「砂の器」と答えるだろう。多くの長編が、権力に胡座をかく「巨悪」を暴き、弾劾するような色彩が強いのに対し、この作品は、物語の展開の巧みさもさることながら、人間の弱さがさらけ出されているようで、共感を覚えるのである。

の方と自負しているので、小間物屋は他人どころか、こちらの方がよっぽど危ないと思つてしまふのである。

長編の方が読み応えがあるという人もいる。そういう人の方が多いのかもしれない。清張自身、長編がよく読まれていることを尋ねるインタビューに答えて、「読者は正直だから・・・」と、暗に、自らも長編に力を入れていると受けとれるような応対をしていたのを目にしたことがある。謎解きの面白さ、扱われる問題の広さ、奥深さ、描かれる人間の多様さ、その関係の複雑さなど、長編でなければ描けないことは確かにある。特に、扱う内容が、政財界、行政、法曹界、教育界等、権力の中に蠢く巨悪を相手にするとなれば、取材、資料を駆使して、多くの紙面を使つて書き込まなければ、説得力あるものには仕上がらない。清張の実力が遺憾なく発揮されるのは、そのような分野であるということをお否定するつもりはないが、私が、清張世界に開眼したのが短編を通してだからだろうか、人をその気にさせる力は、短編の方が勝つている、清張の真骨頂は短編にあると思えてならないのである。「張り込み」の女の切なさ、「鬼畜」の主人公の小心さ、「捜査圏外の条件」の執拗さ・・・どれも身近に感じられてならない。そうそう、「霧の旗」（これは、短編と言うよりは中編

この作品の主人公は、ハンセン氏病だつた父親と共に、故郷を追われるような子ども時代を送つてきた。その子は長じて将来を嘱望される音楽家になつた。その音楽家の子ども時代を知っている人が訪ねて来る・・・。訪問する方にしてみれば、単に懐かしさ故のことであつても、重い過去を捨て、ようやく栄光を手に入れようとしている身には迷惑千万なことであつた。この作品が書かれたのは昭和三十五年である。大人になつた少年が音楽家として脚光を浴び始めたのもその頃とすれば、父子が石を持つて故郷を追われたのは、昭和の初期ということになる。少年時代はもちろん、栄光を手に入れてからも、この病に対する誤解や偏見は、まだまだ色濃く残つていた。野村芳太郎監督による映画化作品の映像が余りに美しかったこともあり、描かれた世界の残酷さ、醜さが一段と目立つように思われた。

好みの長編をもう一つ挙げるとしたら、「ゼロの焦点」になるだろうか。事件の舞台は、北陸の金沢と能登半島である。そこから富山湾を隔てた向こう側には翡翠海岸がある。

終戦後しばらく、東京の片隅で、決して人には明らかにしてはならない仕事に従事していた女が、後にこの地の名士の妻に収まり、人々の信頼と羨望を集めるような暮らし

をするまでになった。彼女の過去を知るものさえ出現してこなければ、幸せは続くはずだった。そこに、思わぬ来訪者があった。彼は、女の過去を暴こうとしてやって来たわけではないのだが、隠しておきたい過去を持つ身には、意図が何であれ、ありがたくない訪問であった。それは「彼女の心に、青空に浮かんだ一つかみの黒い雲を見るような危惧を投げかけていたのである。」

この作品は、推理小説としては、それほどできる良い作品とは思わない。その作品のどこに惹かれるのかと問われれば、知られたくない過去に怯える人間を扱っているからと答えることになる。そして、この作品にはもう一点、私の個人的な思いに触れるところがある。それは、事件の重要な背景として、東京都立川市が使われているところである。立川について書かれたのは、ページ数にしたらわずかなものだが、そこは事件の動機を醸成する上で重要な意味を持つ所であり、東京の多摩地区に育ってきた私にとって、立川市は極めて日常的な場所なのである。

現在、立川駅の北側に、国立昭和記念公園、陸上自衛隊の立川駐屯地、広域防災基地等となって広がる一帯は、戦後しばらくの間、米軍の立川基地として撰取されていた所である。今でこそ、毎年、正月に行われる大学箱根駅伝の

うな音を弾かせて大きな軍用機が上昇した。歩いている人は慣れているのか、耳をおおいたいくらいの爆音でも、上を見る者もなかった。」というものであった。昭和三年頃の情景である。

私が立川市にある高校に通うようになったのは昭和三十八年（一九六三年）、東京オリンピックの前年のことである。返還前とはいえ、すでに立川は、基地の町としての色彩をかなり薄くしていた。かつて、米兵を相手にしていたと思われる飲食店の前を通ることはあったが、それは昔日の名残としての姿であったように思う。時に、軍の関係者と思われる外国人の姿を見かけることはあったが、米兵相手の女性の姿は、高校生の記憶には全く残っていない。離着陸する飛行機の姿を見てきたという覚えはあるが、それが立川基地のものであったのか隣の横田基地のものであったのか、判然としない。

立川に着くと、禎子は立川警察署に向かう。そこは「・大通りから、かなりはいった場所で、大きな建物だった。」と記されている。現在の立川警察署は、立川駅の北口、昭和記念公園に隣接するようにしてあるが、そこに移転する前の立川警察署は、中央線を挟んで反対側、駅南口を出てバス通りを真っ直ぐ行った右手にあった。私は

予選会が、ここ立川駐屯地の飛行場滑走路をスタート地点に、昭和記念公園をゴールとして行われるほど、平和で長閑なところとなっているが、つい最近まで、いろいろと物議を醸し出した所なのである。

昭和二十五年（一九五〇年）に始まった朝鮮戦争の際には、ここが重要な戦略拠点の一つであったということは、高校生か大学生の頃に、何かで読んで知った。その後、昭和三年（一九五七年）、基地拡張反対の闘争が起きる。事柄の本質は分かっているが、「砂川闘争」という表現は、十歳の少年の目と耳にも届いていた。その後、立川基地は、その機能を縮小していくではなかったか。昭和三五年（一九六〇年）に始まったベトナム戦争のときには、立川基地より隣の横田基地の名前を聞くことが多かったように記憶している。それでも、立川基地自体は存在していた。調べてみると、昭和四八年（一九七三年）に全面返還が発表され、それが実現したのは昭和五二年（一九七七年）のことであった。

「ゼロの焦点」の進行役、鶴原禎子が「事件」の背景を調べるためにこの街までやって来て目にした光景は、「外国兵が広い通りを歩いていたが、赤い色彩をつけた日本の若い女が腕を組んでいた。すぐ頭の上を、びっくりするよ

学生時代に何度か、その建物の前を通ったことがあるが、「大通りから、かなりはいった場所」と書かれているので、作品に描かれているのは、私が知っているのと別の所かもしれないと思い、立川に住む高校時代の同級生にメールを送ってみると、現在、警察関係のボランティア活動をしているという彼から、「今どき、どうして立川署なのか？」との疑問とともに、丁寧な答えが返ってきた。確かに、私たちの学生時代には、立川警察署は、南口を真っ直ぐ行ったバス通りであったが、現在そこはスーパーマーケットになっていたということだった。作品に描かれた立川警察署は、そのスーパーマーケットの角を右折して奥多摩街道を西に向かって二、三百メートル行った所、現在、市の施設になっているあたりとのことであった。

解説によれば、「ゼロの焦点」は、昭和三二年に発表が開始されたということである。「事件」発生は執筆と同時に、事件の動機は昭和二十年代の前半、立川が、基地の町として賑わっていた頃に醸成されたという設定である。

戦後の混乱期、米兵相手の裏の世界に身を沈めていた女が、その時代のことを、自分自身では忘れようとして、そして、他人に対しては必死に隠して生きている。その過去は誰にも知られてはならない過去であり、それを知られる

ことは、死を意味することでもあった。誰にも隠しておきたい過去の一つや二つはあった時代だったと言ったらいいのだろうか、誰もが、罪や過ちや恥といったことを心に隠して生きていた時代といたらいいのだろうか。

刑期を終えて刑務所から出て来ることを「ムショ帰り」といって、箔をつけるのは、我々庶民とは隔絶した特殊な世界だけのことと思っていたら、かつて時代の寵児と言われた男が自らのそうした経験を声高に語り、それを、庶民の見方であるはずのマスコミが持てはやす時代である。「闇」とか「裏」とか言われる世界が、そのまま「表」につながっているということなのか、「裏」世界で名を上げた女優が、そのまま「表」世界にお出ましになる時代でもある。それほど遠くないうちに、過去に怯えることをモチーフにした推理小説は成り立たなくなるのではないかと心配になってくる。

この稿の執筆に当たって、数冊の文庫本を読み直しているうち、「時間の習俗」の概要紹介の文章に「神奈川県相模湖で・・・社長が殺された・・・」の一文を認めた。

この作品では、門司の和布刈神事が、アリバイ工作に使われていたということは覚えていたが、肝心の事件が、町村

合併で今や我が家と同じ、相模原市緑区で起きていたことは、全く記憶にはなかった(はじめて作品を読んだときには、東京都府中市に住んでいて、いずれ相模原に住むことになるとは夢にも思っていなかった)。

この作品でも、愉しい散歩が出来るかもしれないと、読み直してみた。すると、羽田空港から犯行現場の相模湖に至るルートとして、羽田から川崎に出て南部線に乗り、立川で中央線に乗り換えて相模湖駅に向かう、という説明があった。なるほど、ちよつと思いつかないルートである。

南部線、中央線、立川、相模湖と身近な名称が出てきたのは思わぬ出会いだったが、この作品では、もう一つ意外な出会いがあった。二〇一五年の秋、小倉の清張記念館を訪れた前の日に、仕事仲間と博多港に近い老舗料亭に食事に出かけたのだが、作品の舞台に、私たちが行った料亭が使われていたのである。「(容疑者) *氏は大東商会の幹部と(福岡)市内の新三浦屋という水たき料亭で会食をしています。宴会が終わったのが午後九時で・・・」という件である。私たちが食事をしたのは、新築してまだそれほど時間は経っていない店舗だったので、作品とは全く違う建物だろうが(場所も、市の中心部からはずいぶんと離れていた)、水炊きの新三浦屋は、知る人ぞ知る名店とい

うことである。ふつくらとした鳥肉もさることながら、水炊きのスープを澄まし汁感覚でいただくというのは、初めての経験であった。帰ってから、「九州で何かおいしいもの食べてきましたか？」と聞かれる毎に、博多に行ったら是非とも・・・と勧めている。そこに行ったことがなければ、どうという感慨もなく読み飛ばしてしまうところだが、自分の食してきた料理に、容疑者が(おそらくは、清張自身も)舌鼓を打っていたとなると、行を追う目が、しばしそこで留まってしまおうのであった。

【高井戸・旧松本邸】

旧邸散策のためにと思つて清張記念館で航空写真を略図にしてメモして来たが、それは全くの無駄であった。なぜなら、記念館でもらったパンフレットに、上部が少しカットされてはいるものの、記念館にあった航空写真が載っていたからである。

その写真を頼りに、グーグルマップを、高井戸駅から井の頭線に沿つて隣の浜田山駅に向けてスクロールしてみると、両駅の間あたりに、信じがたいことだが、昭和四三年の写真と同じ建物と芝生の庭が現れてきたのである。線路の向こう側にある、やや広い庭を持った特徴ある建物

は、幼稚園のようだ。近くに住んでいる人たちには失礼な言い方になるのかもしれないが、写真の一面だけ、時間の流れから取り残されてしまったような印象を受けたのである。そして、もつと不思議だったのは、移築されたはずの旧松本邸が、形を変えずに(?)残っているように見える点である。離れのようになっていた一部分だけを切り離すようにして移築したということなのだろうか。公開されている訳ではないから、外から見ても何も分からないだろうが、一度、この目で見てみたいと思った。

間もなく定年退職を向かえようという年の早春、仕事の帰りに、渋谷駅から井の頭線の下り電車に乗った。旧邸は、浜田山駅と高井戸駅のちょうど中間あたりに位置するので、どちらで降りても歩く距離は同じようなものだが、手前の浜田山駅で降りて歩くことにした。その方が一駅分節約できるからということもあるが、帰りに、ある期待を込めた仕掛けを考えたのである。

浜田山駅から旧邸までは、わかりやすい道のりだった。詳しい地図を用意していたこともあるが、ジグザクに入り組んでいるように見えた道も角まで来れば、その先の見通しが利くので、迷うことはなかった。駅から五分ほど歩くと、ひっきりなしに電車が通過する線路のすぐ脇に、見覚

えのある二階建が見えてきた。道路に面して建っている、一見、長屋門を思わせる建物はガレージだろうか、グレーのシャッターが降りていた。清張が、航空写真を撮る飛行機の方に顔を向けて立っていた芝生の上に脚立が置かれているのが、垣根越しに見えていた。庭木の手入れに職人が入っていたようだが、夕暮れが迫っていたせいか、人影は見えなかった。

正面の門には大きな門扉が設えられていて、長身の私でもそこから中をうかがうことは出来なかった。小倉の記念館に展示されていた玄閣と応接室は、この門を入った正面にある大きな二階建て（現在は誰も住んでいない？）から剥ぎ取られて行ったのだろうと想像した。

清張がここに居を構えたのは昭和三十六年（一九六一年）、記念館に展示されていた航空写真が撮られたのは、昭和四三年（一九六八年）のことである。写真が撮られた当時、井の頭線終点の一つ手前の駅（井の頭公園駅）から歩いて十分程の所に親しい友人が住んでいて、京王線沿線に住んでいた私は、彼の所に遊びに行くときには、明大前乗り換えで井の頭線を使うことが常だった。私が、井の頭線に乗って清張邸の脇を通り過ぎるとき、文豪は、記念館にあった、あの書斎の机に向かって、せつせと、「小説 三

億円事件」等の作品に取り組んでいたのだ・・・。

同じ敷地内のすぐ西隣に、出窓のある洋風の大きな二階建てがあった。門柱には、松本某の表札があったので、ご子息の家ということなのだろうか？家の周囲を一回りしてみようと思ったが、道は行き止まりになっているようなので、来た道を少し戻り、踏切を渡って、線路の反対側に出ることにした。そこは、やや高台になっていて、旧邸を探すときに目印にした、三角形の庭のある大きな屋根の建物（幼稚園）があるはずであった。その園庭越しに旧邸が見えるかと思ったのだが、少し距離がある上にフェンスが邪魔をして、清張邸の様子をうかがい知ることはできなかった。

そこから、神田川に沿って高井戸駅に向かった。暗くなる前に、と思ったけれど、駅に着いたときには、すっかり暗くなっていた。

ここに来てみようと思ったのは、小倉の記念館で旧邸が井の頭線の沿線にあると知ったからであり、ネットの衛星写真で確認してみると、旧邸は、少なくともその外観だけは健在と見えたからだ。記念館の写真には、旧邸の脇を渋谷に向かうアイボリーの井の頭線が写っていた。だから（という表現が適切かどうか自信はないのだが）、私は、

その電車に、つまり、清張邸の脇を通っている井の頭線の高井戸駅から渋谷方向に向かって上り電車に乗らなければいけないと考えたのである。そうすれば、この次、小倉に行つてあの写真を目にしたとき、アイボリーの先頭車両の一番前のドアに、私自身の姿を探してみることが、あながちナンセンスではないだろうと考えたのである。

【五十年目の散歩】

この稿の執筆にあたって、清張作品の読み直しをきたことは先に記した通りである。「点と線」に始まり、「ゼロの焦点」、「時間の習俗」等の長編、学生時代に清張にのめり込むきっかけとなった新潮文庫の傑作短編集・・・気づくと完全に「清張中毒」に冒されてしまっていて、靴に清張作品が入っていないと落ち着かなくなっているのだった。清張ファンは、大なり小なり、こうした中毒症状を経験しているはずである。

「これで最後にしよう」と意を決して買い求めた未読の短編集の中に、半世紀前に府中市で起きた三億円強奪事件を扱った作品（「小説 三億円事件」・以後「小説」と略記）が収録されていた。

この事件は、強奪された金額の大きさや、犯行の手口の

特異さ・鮮やかさ故に、世間の注目を集めていたが、私にとっては、私の生活圏で起きた事件ということの方が意味が大きかった。

事件が起きたのは、昭和四十三年（一九六八年）十二月の午前中のことである。狙われたのは東芝府中工場従業員の冬のボーナス。当時、給料や賞金は、銀行振り込みではなく、袋詰めにした現金が直接手渡されていたのだった。当時、私は東京学芸大学の三年生、府中市中河原にあった自宅から京王線で府中に出て、そこから大学のある小金井までバスを利用して通学していた。

あの日、遅くとも、昼休み頃になると、学生たちの間でも事件のことはかなり知れ渡っていて、私が府中から通って来ていることを知っている友人の中には、「どこに行っていた？」「どこに隠してあるんだ？」と声をかけてくる者もいた。ニュースを知らない私がポカンとしていると、事件のあらましを話してくれた上で、最後に、「アリバイは大丈夫か？」と念を押される始末だった。

事件が起きたのは午前九時半頃、ちょうどその頃、私は、京王線の府中駅から中央線の武蔵小金井駅へ向けて、バスで小金井街道を移動中だった。事件は、小金井街道と、それとほぼ並行して走る府中街道との間で起きていた。二つ

の街道の間は、距離にして一、二キロ。私の乗っていたバスの近くを、パトカーや白バイがサイレンを鳴らして疾走していたということはなかったから、バスに乗っていたのは、事件の直前か、事件後としても、まだ警察が動き出す前、まさに限りなくそのときに近い時間帯だった。だから友人の忠告に対しては、「私には、その間のアリバイはない」と答えるしかないのである。

バイクや車など種々の証拠品が遺されていたこともあり、犯人は直ぐに捕まるだろうと、誰もが思っていた。しかしそうした予想とは裏腹に、犯人逮捕のニュースは一向に報じられなかった。

事件から半年ほどして（一九六八年四月）、この事件の新展開に遭遇した。四年生になっていた私は、新学期早々で、まだ授業は始まっていなかったのだろう、午後の比較的早い時間に大学の東門を出て、武蔵小金井駅に向かった。そして、門を出て間もなく、上空がなんとも賑やかなのに気がついたのだった。何機かのヘリコプターが真上で旋回したりホバリングしたりしているのである。脳天気にも私は、テレビドラマの撮影でもやっているのだろうと考え（とつさに思い浮かんだのは、当時人気があった「ザ・ガードマン」の撮影であった）、そのまま帰ってしまったの

だった。夕食時にニュースを見ていて、三億円が入っていたジュラルミンケースを積んだ車が、大学近くの団地（本町住宅）の駐車場で発見され、ヘリは、それを上空から撮影していたらしいということを知ったのだった。犯行自体、大胆不敵であったが、犯行に使用された車が、半年近く、誰にも気づかれずに放置されていたということに、改めてこの犯行の意外さ・見事さを思い知るのである。

「小説」には事件に関する参考地図が載っていたので、それを拡大コピーし、時系列的に犯人の動きを書き入れてみた。すると、バイクや車を潜ませておいた所から、現金が強奪された犯行現場を経て、団地の駐車場まで、無駄のない見事な一筆書きができることに気づいたのである。

この一筆書きは、大雑把に見積もって全長十四、五kmほどである。そこまで分かっていると、どうしても現場をこの目で見たい、この足で確かめたいという気持ちが抑えられなくなってきた。そこで、本稿をここまで書き進めてきたある春の日の午後、少し長めの散歩に出かけたのである。「小説」の参考地図には、第一現場から第四現場までが特定されているが、犯人はこの順序で動いたわけではない。犯人は、あらかじめ、第三現場に偽白バイと乗用車①を用

意すると、事件当日の朝、乗用車①で国分寺の信用信銀に向かった。現金が確実に運び出されることを確かめるためである。そこで、私の散歩も、この信銀から始めることにしたのであるが、信銀は、後の銀行再編の一環から、大手銀行に吸収併せられたと聞く。かつて信銀があったのは、現在はコンビニとなっている辺りだろうか。国分寺駅北口周辺といえば、大学に勤務していた頃には、たびたび飲み歩いた所だが、その頃、「事件」を思い出すことはなかった・・・。

信銀から出てきた現金輸送車を尾行して国分寺街道を南下した犯人は、途中で（おそらく、現在の東八道路路辺りから）側道に入って第三現場に立ち寄り、そこに停めてあった偽白バイに乗換えると、側道の反対側（学園通り）の出口で輸送車の通過を待った。この側道は、現在は一方通行になっていて、車やバイクは学園通り側には出られないので、今日ではこの手段は使えない。偽白バイと尾行用の車の置き場所をピンポイントで特定することは難しいが、「小説」にある番地から推測すれば、そこは現在、駐車場として使われている辺りで、周囲の様子は、当時とあまり変わっていないのかもしれない。

側道から学園通りに出れば、犯行現場（第一現場）は目

と鼻の先である。道路の南側には、犯行を隠すかのように、府中刑務所の高い塀が続いている。その向かい側は小学校の校庭である。学校前の、学園通りを跨ぐ歩道橋付近が犯行現場だったはずで、かつては、近くの刑務所の壁の内側には監視塔があったが、現在は撤去されてしまっている。ここから、現金の届け先の東芝まで、車なら二、三分といったところである。

偽白バイで追ってきた犯人は、現金輸送の車を停めると、車に爆発物が仕掛けられていると信じ込ませて信銀職員を遠ざけ、自ら車を運転して、その場を立ち去った。この日は、朝、雨が降っていたようだし、この通りはもともと人通りも車の通りもそれほど多くはない。おまけに道が微妙にカーブしていて、見通しも利かない。

車を奪った犯人は、学園通りから府中街道を右折して、次の中継基地に向かった。現金輸送車はすぐに手配されるだろうから、早く次の車に乗り換える必要があった。その乗り換え場所が第二現場（国分寺史跡）で、第一現場から車だったらほんの一走り、今歩いてみて、徒歩でも三十分とかからないことが分かった。そこは、府中街道から数百メートルほど入った国分寺史跡の一面で、今でこそ、史跡に食い込むようにして住宅が建ち並んでいるが、当時は

ずいぶんと長閑な所だったのだろうと思う。

犯人は、ここにも、あらかじめ逃走用の乗用車②を停めておいたが、そこは、近隣住民も自家用車の青空駐車に充てているような所で（車を所持するのに、車庫証明が要らなかつた訳ではないだろうが・・・）、停めてある車に特別な注意を払う人はいなかつたようだ。

この第二現場まで来て、面白いものを見つけた。近くの公園の隅にあった一枚の立て看板である。すっかり風化が進んで白く変色しているために、一見した所では何が書かれているか判然としないのだが、近づいてよく見ると「道路はみんなのもの 青空駐車はやめましょう 警視庁・小金井警察」とある。その傷み具合から、五年や十年前に立てられたものではないことは明らかである。そして、史跡の一面、かつては誰もが気軽に車を停めていたであろう辺りには針金で囲いが施してある。思わず、青空駐車を黙認していたことが犯人逃亡の手助けになったことを認め、苦虫を噛みつぶしながら看板を立てている警察の姿を想像してしまう。「現場百遍」は、事件の犯人に対してだけでなく、警察に対しても成り立つ標語であることが分かつた。ここで車を乗り換えてしまえば、ひとまず安心である。そこから第四現場の本町住宅までは、車で十五分ほどかか

るだろうか。道もよく分かっているし、歩けない距離ではないが、長い距離を歩いて足が攣ってきたので、だましまし国分寺駅まで歩き、武蔵小金井経由で第四現場に向かうことにした。

犯人が、ジュラルミンケースから、どこで現金を抜いたのかについてははっきりしていない。大きなケースから多額の現金を取りだすといった目立つ作業を、人目につく所ではないであろうという理由から、私は、この「一筆書き」ルートの近くにアジトがあつて、そこで取り出し、空のケースを乗用車②に載せて団地の駐車場に放置したと想像するが、第四現場で行つたのではないかという説もあるようだ。

それよりも「小説」を読んでいて気になつたのは、現金の取り出し方について、何の説明もなかつたことである。信銀から現金を運び出すとき、ケースには必ず施錠するであろう。その際、開けるための鍵は、信銀の担当者が持っているはずである。ケースを、ボールか何かでこじ開けたという話はなかつたと思うので、なぜ鍵が、犯人の使いやすいつころにあつたのか、疑問に思うのである。鍵をケースの鍵穴に差したままにしておくという事はあり得ない。信銀職員が鞆に入れ、車中に置いたままにしておいたのを、

犯人が車ごと持ち去ることができたということなら、それは犯人にとつては、大きな賭に勝つたということになる。信銀職員が鍵を自分のポケットに入れていたら、車外に持ち出されてしまう訳だから。用意周到な犯人は、そういう場合も想定して準備していたが、幸運にも鍵は犯人の手に遺されたということなのだろう。

本町住宅は、近年大規模な改修工事が行われたので、件の駐車場も分からなくなつてしまつたのではないかと心配していたのだが、建て替えたのは団地の西側半分で、犯人が利用した駐車場周辺は、昔と変わつていないようだった。学生時代、山歩きのクラブに所属していた私は、トレーニングの一環で、大学からこの団地を通り抜け、小金井公園まで、仲間たちとよくランニングをしたものである。今、回歩いてみて、当時私たちが走り抜けていたのは、団地の建て替えの済んだ辺りだったということが分かつた。だから、残念ながら（と言つたらいいのか）、ジュラルミンケースを積んでシートを被せられた車をこの目で見ることはなかつたと言つたわけである。

「小説」には、この団地の駐車場にも、犯人はあらかじめ車③を置いておき、乗用車②を放置した後（場合によっては、ここで現金を積み替えて）、車③で逃走したのは

ないかという推理が紹介されている。しかし・・・と思つたのである。その車も盗難車であることを考えれば、今度はその車の処理に困ることになる。だから、三億円は近くのアジトに置いてあり、ここへはジュラルミンケースと乗用車②の処理のみやつて来たと考えるのが合理的と思う。そして犯人は、車を誰の目にも触れるところに隠したあと、五十年目の散歩で私が辿つたのと同じ道を、私とは反対方向に歩いて小金井駅へ、あるいは直接アジトへと向かつたのではないか・・・。

(了)